

文 字 ・ 表 記

昭和四十五・四十六両年度にわたる文字・表記の関係のものを一覽してみての所感を述べよう。

文字・表記の領域にわたるものは数多くあつたであらうと思はれるが、その絶対数が、他の領域に比べてみてどんなつりあひになつてゐるものかは分らない。筆者にとつては、相変らず、この方面には論文がすくないのではないかと、いふのが率直な感懐である。また、文字・表記を全く正面から問題にしようしたものといふことになる、甚だ寥々たるものであつたと思はれた。「思はれた」といふのは、文字・表記に関する研究は、やはり相変らず多くないといふやうに私に感じられたことが、あるいは非常な思ひ違へかも知れなうといふ懸念もあるからである。筆者の考へるところの文字・表記といふのが、一般の人々の考へるところと大いに異なつてゐるためか、手もとに送られて来たものは四十足らずであつて、その中には私の考へるところでは、全く無関係のものも交つてゐたのみではなく、関係ありと仮に認めるにしても、正面からの文字・表記の研究とは評価できないものが大部分だつたので、このやうな状況ならは、別の領域に位置づけられた論文の中にも、これらと同じ程度の

文字・表記の取扱ひは多分見られたであらうと考へられもしたからである。

たとへば変体漢文のなかに見られる、ある用字の特徴を指摘してそれを文体的特徴と認定し、変体漢文のスタイルを見きはめて行かうとする論は、一体文字論といふべきものなかつち傾かれるところがあつた。それを全面的に、文体論といふ領域に押しこめてしまふには、なほ、漢字そのものを扱ふ部分が多いといふ理由で、文字・表記論においても取扱つてしかるべきだといふ考へ方は、必ずしも分らないではないけれども、それは、文体といふ概念を、はじめに規定してかからないための恣意的な逸脱ではないか。

変体漢文は、もちろん用字がすべて漢字であるから、そこでは、問題の提示の時から漢字にかかはることがらを無視しては何も云ふことができないかも知れない。しかし、漢字かなまじりの表記体の文の文体を論じる時と、あまりにも態度が異なるといふことを気にしながら読みすゝむならば、結局、その漢字についての拘泥自体は、テキストの読解の作業それ自身であつて、それ以上に漢字の性格やそのシチュエーションでのその用字の帯びる特性を論じては

山 田 俊 雄

ないことに、はなはだしい不満をおぼえるのである。小林芳規の、いくつかの彼のいはゆる「訓字」もしくは「訓漢字」に関する論をよむと、そこでは、漢字を書記の道具に用いる場合の特定の圏を仮定して、その内実を明らかにとらへて見ようといふ、具体的な文字論としての目標が掲げられてゐて、このやうな論の読後には、たとへそれが煩雑な現象の記述の域にまだとどまつてゐるにしても、極めて爽快な思ひとそして重みのある手ごたへが感じられた。

文字・表記にかかはる論といふものは、過去の文献を取扱ふ文献的言語史学においては、全く日常茶飯のことであるべきものであつて、それは文字・表記を全く論にくみ入れることのない音韻史学などといふものが、あり得なかつたことで直ちに分ることである。

土井忠生はかつて謙抑にも自らをさして資料屋といふことばで表現したことがあつたが、もしそのひそみに倣へば、言語史なかつてく日本語史にかかはるほどの研究者は、多分文字屋でなかつたことばかりで有り得なかつたし、将来もまた文字屋でないことは有り得ないことであらうと思はれる。文字の研究が、言語とかかはりをもつて行はれる限り、それはいかにあるべきかを、逆に考へながら進めなければならぬのは、むしろ、従来、言語史研究が、特に日本語の歴史的研究が、さらにはその中で音韻史的研究が、文字を取扱はずして何ごともなし得なかつた如くに、それほど深い関連をもつてゐたからこそである。すでに文字とのかかはりを十分に明らかにしてゐる言語史の研究の領域の中に、特に文字・表記の研究を、一つの領域として特立することが必要なことは、分り切つてゐるやうだつたに拘らず、その考へ方が、十分に伸張したその範囲を明白にしてゐないのが現状だとすれば、私には、その中の文字・表

記の研究は、他のいづれかの領域の中に拡散するか、収斂されてしまふかであつてよいと思はれる。私には、この二年間のうち文字・表記にかかはる論としては、小林芳規のもの数篇（将来は一つの編述としてまとめてあるべきものであらうが）あるいは峠岸明の今昔物語集の用字についての論など以外には殆んどあげつらふべきものが見当たらないといつてよいと考へてゐる。

いつの頃からか、学界展望を、本誌が試みる時、多くは、一同に総花を出すといふ式になつて、なにがしかのことばを、すべてのペーパーにあいさつ風に贈るといふことが習慣となつて来たが、私には、それがいくらか不愉快にも、また滑稽にも思はれた。今、自らその任に當つてみて、人情の自然なりしものかといふ嘆きを思つてはゐるけれども、甚だ未練のものとしては、その方式に従つてゆくことも不愉快なので、きはめて自在に所懐を吐露する迄のことと思つてゐる。

かめい・たかしの、かなに濁音専用の字が生じなかつたといふ事実をめぐる論があつた。一読して私はこの困難な主題についてのかめい氏の考へ方を知るに極めて大きな便宜が与へられたと思つた。そしていかにこの主題が困難で解きたいものであるかを十分に知らされた。そのやうな意味で、私は蒙を啓いてもらつたといふ点で謝意を表したいといふのが只今のほんねである。そして、文字・表記の論の方法論の多様さを思ひ知つた。私は、きはめて迂遠な漢字の用法の調査や、使用漢字字種の調査などに、日も足らぬ想ひにいつも焦慮してゐるのみであるけれども、その焦燥の中で、かめい氏の論のやうな、ある種の饒舌に接すると、「作業よりは思索を」といふ彼の行き方（失礼を許して云はせてもらふならば……）からの

批判を痛切に甘受しなければならぬときへ思ふのであるが、小林芳規の作業と対比してみても、ここにやはり、文字・表記の領域を特立すべき理由を見出すのである。私は、音韻史学の裏通りといふことばで、文字史学を考へようとして来た。かめい氏は多分表通りを歩いてゐる人の、そして、数少い一人の人であらう。

文献的言語史学とかなり近いところに資料の論が位置してゐるかと思はれるが、文学史研究者が、かつてその多くの精力を注いだことのある本文批判の学も、またすぐ傍にあるといつてよい。土佐日記の本文についての論述のやうなものは、多分、私の手もとには、実際に報告され公刊されたもののほんの一部分しか送られてゐないのであらう。それはいはゆる国語学の領域には属さない人々の手によつて多く書かれたことでもあらう。したがつて、私は、極めて局部的ののみ知り得たものをここで特に取扱ふことは避けるべきものと判断して論評を加へない。また毛利正守が「古事記に於ける用字法をめぐつて」と題して、「避」字の読法や「坐」字の用法について論じたものなどについても、私は論評しない。

といふのは、文字・表記についての研究の今後の方向については、かねてから私は、ある個別作品について、部分的にしかもその中の某字某字といふ特定のものをランダムに取り上げる方法に殆んど興味がないからである。方言研究の水準は、現代の言語地理学的方法の実施にいたるまでは、極めて低かつたと思ふ。ことに語彙論的な領域では。文字の研究についても、そのアナロジが許されるならば、今もつて文字・表記についての論と考へられるもののは殆んどはかつての俚言研究の段階でとどまつてゐるやうに思はれる。私は、まとまつた文字作品を、個別に網羅的な記述を行ふことが

流行することを幾年も待つてゐる。そしてそれを大方の士に提唱して来たつもりでもあり、自分も実践したいと念じて来てゐる。しかも、多分愚公移山の迂遠を理解してはくれないのが現況であらう。私はこのやうな展望などに拙い文を寄せるよりは退いて、自らの書齋の中の作業にのみ従つてゐればよかつたのであらう。

遠藤邦基の「表記の混乱はどこから生じるか——オ混一資料への疑問——」といふ、非常にアトラクティブな題目の論があつた。率直に云へば、主題は興味がある、しかしその行文の意味をよく理解しえなかつたし、論証も物足りない。「パロール」といふことばが二度ほど使はれてゐるけれども私は理解できなかつた。用語の規定がなく、論証が行届いていないといふ欠点は、多分私自身にも存することであらうから、あまり多くをいふことは慎まなければならぬ。前後の行文の中から文脈を掴みとりさへすれば何とか心情が分るといふ程度ならば、さして欠陥だともまでは云ふつもりはないけれども、次のやうな場合はいかかと思ふ。(別の人の文だが、)

「これまで述べてきたところから知られるように、宣命には和漢混淆があり、広い意味での和漢混淆文に含まれるべきものである。東大寺諷誦文稿、あるいはのちの説話集などの片仮名交じり文とは、文章法にも共通するところが多く、あわせて後の中世和漢混淆文の源流とみなすべきであらう。

さて、和漢混淆文とは、狭義には主として中世の軍記物語などに見られる独特の文体をさして言い、これと宣命の文章とは、一見はなほだしい隔たりがあるように思われる。しかしそれにはジャンルや時代による相違を考慮しなければならず、基本的な特色をぬきだして比較してみると意外に似た点があるのである。こ

うしたところからも和漢混淆文の源流としての宣命の特質がうかがわれる。(下略)

右のやうな文の中で和漢混淆と和漢混淆文とはそれぞれ何をさし、どのやうに限定されるものなのか。統紀宣命に、和漢混淆が存在することは、すでに早く指摘されたところで、先学の業績についての視野をもつとつぶさにひろく、こまかくする必要があると思はれる。中世の和漢混淆文の「源流」といふ時の源流とは何を意味するかを規定しておかないこの論では、恐らく春日政治や築島裕の論に対して新しい見解といふことはできないであらうし、そのみならず、先学の論を誤解したか、もしくは読み落したかといはれてもしかたがあるまい。右引用の文は、ある雑誌の懸賞論文に入選したもののやうであるが、この文の中で、再読字に関する文言は、明らかに小林芳規の論をひろく見ないで、一部によつて曲解してゐるやうにうけとれる。私は本来かかるところまで論評を加へるべき資格のないものであるけれども、懸賞論文として賞を与へられたものが、先学の論を十分に消化してゐないまゝに客観的に新しい、独自の論旨をもたない域にとゞまつてゐるものであるとすれば、学問とは一体何なのかを疑はしく思ふ場合も生じてくるかと思ふ。ランダムに対象を見定めて、しかも習作の如きものを次々と作る、その中のものを順次相手次第によつて選び出して発表するといふ体の研究業績は、私は、売文家とさしてちがひがないと思ふ。売文家といつて、決して卑しめてはゐないのだが、研究論文は、その目標と方法とが明確で、しかもオリジナリティーとプライオリティーの点で誇るべきものを必ずもたなければならぬこと位は、自明のことではないか。私は、鮮烈な立言による結論をもたなくても研究目的と方法と

が、十分よく対象を捉へてゐれば文字・表記の領域の現在の水準ではまだ評価できるものだと思ふ。他の研究の余材であつても一向にかまはないけれども、学術論文に必要、十分な条件は欠かないものを書いて欲しいと思ふ。そして、生産的であること。一步をすゝめて、そこから新しい一步が踏み出されるべきものであることが一番大切であらう。

次に、発表順に論文編著の一覧表をかかげる。(殆んどが執筆者から、私に対して送付されたものであるが、他に手もとにあるものを加へた。すべてが執筆者の意志によつて文字・表記の關係論文としてここに扱はれてゐるわけのものではないことをあらかじめ諒せられたい。そのことわりとして、題目の上に○印を加へたものが、執筆者から送られて来たものである。)

44・7 ○古事記に於ける用字法をめぐつて

——「選」と「坐」を中心に—— 毛利正守

8 頁 2 段 10 頁

勢陽論叢第二号

44・11 ○定家本土佐日記本文分析資料

清水義秋・星田良光 9 頁 1 段 23 頁

——高部批判による本文処置について——
——「上佐日記本文」「かいそくむくのせん」の場合——

清水義秋 9 頁 1 段 21 頁

同右

44・12 ○外来語の表記について——森嶋外の場合——

石田美代子 B 5 9 頁 2 段 8 頁

大阪府立工業高等学校研究紀要第三卷

45・2 ○日本書紀の「字詰め」について——特に宮内庁本を中心に——

毛利 正守 9ポ1段14頁

芸林第二十一卷第一号

45・3 ○かなはなぜ濁音専用の字体をもたなかったかをめぐって
かたる かめい たかし 9ポ1段92頁

人文科学研究12

45・4 ○出雲風土記の漢字表記
加藤 義成 9ポ1段20頁

篠原実教授退官記念表現論集

45・6 ○宣命における「あり」の融合過程
小谷博泰 8ポ2段9頁

文学・語学第五十六号

○家持用字法の研究——A部卷十六以前の家持作歌の検討——

古屋 彰 9ポ2段12頁

金沢大学法文学部論集文学篇18

45・10 上代における書記用漢字の訓の体系
小林 芳規 8ポ2段30頁

国語と国文学第四十七卷十号

45・10 点本の原初形態とその補読の実字点について
鈴木 一男 8ポ2段12頁

同右

45・10 平安末期における漢音の一断面
こまつひでお 8ポ2段16頁

同右

45・10 類聚名義抄の「呉音」の体系
渡辺 修 8ポ2段13頁

同右

45・10 頼山陽の書簡に見える漢語について

佐藤喜代治 8ポ2段13頁

同右

45・11 ○古典校勘における定家の書写意識——土佐日記の場合——

清水 義秋 9ポ1段35頁

日本文学論考(塩田良平先生古稀記念論文集刊行会 桜楓社刊)

45・11 ○日本書紀における大江家の訓読について

小林 芳規 8ポ2段14頁

国学院雑誌第七十一卷十一号

45・11 ○続日本紀宣命の訓読に関して——心中古止・惠賜比・所思行——
小谷 博泰 8ポ2段5頁

解釈第十六卷十一号

45・11 ○平安初期訓点資料の類別——主に仮名字体による——

小林 芳規 B5孔版9ポ2段27頁

方言研究年報第十三号

45・11 ○日本書紀私記甲本における傍訓の性格について
福田 益和 9ポ2段10頁

語文研究第二十九号

45・12 訓点資料の訓字について
小林 芳規 8ポ2段15頁

文学・語学第五十八号

46・1 言語と文学
岩淵悦太郎 9ポ2段15頁

国語と国文学第四十八卷第一号

46・1 ○宣命体の成立過程について——藤原宮跡出土木簡をめぐって——

小谷 博泰 8ポ2段9頁

国語と国文学第四十八卷一号

- 46・3〇訓漢字一覧(稿) 第一部傍訓 小林 芳規 謄写1段28頁
 46・3〇中世片仮名文の国語史研究 小林 芳規 9ポ1段182頁
 46・3〇「続日本紀」宣命の文章と語法——和漢混清文の源流として—— 広島大学文学部紀要特輯号3
 小谷 博泰 8ポ2段7頁
 月刊文法第三卷五号
- 46・3〇公家日記に見える用字上の一問題
 ——漢字一字とそれを含む同義の漢字二字の場合——
 小山 登久 9ポ1段24頁
 ノートルダム清心女子大学国文学科紀要第四号
- 46・3〇訓漢字一覧(稿) 第三部 音義・訓注・古解書 小林芳規 謄写1段93頁
- 46・3〇今昔物語集における漢字の用法に関する一試論(一)
 峰岸 明 8ポ2段19頁
 国語学第八十四集
- 46・5〇出雲国風土記伝写の実態 加藤 義成 9ポ1段19頁
 神道学昭和四十六年五月号
- 46・6〇同前々項 (二) 峰岸 明 8ポ2段17頁
 国語学第八十五集
- 46・7〇「皇太神宮止由気宮儀式帳」の特色 ——平安初期国語資料として——
 小谷 博泰 8ポ2段71頁
 国語国文第四十卷七号
- 46・8〇表記の混乱はどこから生じるか——ヲ・オ混一資料への疑問——
 遠藤 邦基 B6 9ポ1段29頁
 王朝第四冊(王朝文学協会編)
- 46・9〇宣命の文体と上代における漢籍の訓読 小谷 博泰 9ポ2段9頁
 文学・語学第六十一号
- 46・9 漢字の定訓についての試論
 ——キリシタン版落葉集小玉篇を資料にして——
 山田 俊雄 9ポ1段26頁
 成城国文学論集第四輯
 小林 芳規 口頭発表
- 46・10〇密教の角筆点資料 訓点語学会(米沢10・15)
 小林 芳規 8ポ2段9頁
- 46・10〇聚分韻略の版本について 奥村 三雄 8ポ2段9頁
- 46・10〇活用語の漢字表記に付せられた送り仮名についての試論
 ——歌集に見られる場合—— 佐藤 克子 9ポ2段25頁
 成城文芸第六十一号
- 46・11〇和名類聚抄高山寺本・三宝類字集高山寺本(解題) 渡辺 実 9ポ1段30頁
 天理善本叢書第一期第二卷
- 46・11〇高山寺本古往来における漢字の用法上の性格
 ——振仮名の有無を手懸りとする考察—— 小林 芳規 8ポ2段12頁
 国文学叢五十七号
 臨川書店刊
- 46・12〇京都大学蔵本平曲正節解題 奥村 三雄 9ポ1段50頁
- 46・11〇古事記の用字法と訓読の方法——訓注よりの考察——
 小林 芳規 8ポ2段15頁
 「文学」46年十一月号
- 47・1〇天和三年黄檗版観音経 奥村 三雄 9ポ1段写真23頁

47・20 上代文献に見える字音注について 四

——「新撰華嚴經音義私記」の場合——

近代語研究 第三集

白藤 礼幸 9 頁 1 段 31 頁

茨城大学人文学部紀要（文学科論集）第五号

47・30 アクセント史料として見た平曲譜本

奥村 三雄 9 頁 1 段 32 頁

文学研究 第六十九輯別冊

さて、ここで、昭和四十五年・四十六年とを概括して述べるとするならば、国語学会の四十六年度大会で行はれたシンポジウムでの文字論のやうに新しい分野への試みも有志の間に生じて新しい萌芽がすでに浮かせてゐるが、私としてはそれを十分評価するほどには至つてゐないと思ふので、やはり小林・峰岸両氏の取扱はれた主題の提示と、その展開のための調査を大いに顕彰すべきものと考へる。すなはち、漢字の字体とか字形の変容などといふ些末なことではなく、漢字を、使用文字のシステムの中で捉へて、その実態を明らかにしようといふ傾向である。漢字は、日本語を表記するに役立てられるものとして、日本語の歴史の中で、なにかんづく重要な位地を占めて来たのだが、それが、どんな風にあつたかの実態を明らかにするためには、或は小林氏は「訓の体系」といふやうな、いくらか先取りした大げさなことを使つてはゐるが、——そのやうなものを直接的にとらへようとして大きな努力を払つて歩を進めてゐる。先年、山口佳紀が今昔物語集の自立語の片仮名書について論じたことがあつたが、あの大胆さは小林氏にはないけれども、むしろ

着実に、ある方向に文字表記の研究が動き出してゐるものを感じる。峰岸明の場合、色葉字類抄の所収漢字と訓をもつて今昔物語集の副詞表記の用字を検討した上で、日常書記漢字のレベルを見通して行かうといふ試みである。これは、おそらく、今後何年か、着実に進展を見る領域であらうと思はれる。

私にとつてもそれは極めて興味ある主題であつて、「漢字の定訓についての試論」などといふ拙劣なものを書いたのはその一つの過程である。

漢字についての論が中心になつて来たことは、むしろ、漢字について論ずべきことがあまりにも多いからであつて、こまつひでおや鈴木一男、また渡辺修、白藤礼幸の字音に関するものの出現は、当然今後もつづくであらうし、奥村三雄その他の人々の音韻史にまたがるものも、これは益々必要な方向である。

文字・表記研究が、もし漢字において順調に進展し、しかも日本語世界にもつとも密接したアプローチに立つとすれば、おのづからそれは、漢字表記の單語の論に及ぶ筈である。佐藤喜代治の漢語についての報告が、この期間にもまた加へられたが、この方向への進展も漢字の扱へ方の上では是非ともなくてはならないことと思はれる。

付記

論文を送つて来られた方々に対しては、一々にその都度受領の旨の返事をさし上げるべきものと考へてゐたが、とりまぎれて返事をさし上げずに今日に及んでしまつたことが多かつたので、ここに失礼をわびます。また、しめきりの期日までに成稿せず、多くの迷惑を編集の方々に及ぼしたこともあはせて謝します。